Happy Valentine 2017

TAKENOKO NOVELS

もりか発案

Cadbury
GODIVA
Chocolatier
PEARLS
white chocolate
Real

TAKENOKO NOVELS

Happy Valentine 2011

もりか 発案

竹の子書房文庫

※本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものもありますし、そうでないものもあります。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

カバー　とん

巻頭言

もりか

古今東西、恋愛にはドラマがつきもの。うまくいったり、いかなかったり。永遠だったり……三日天下、なんてことも。

でもどんな恋も、始まりはときめきと不安とでいっぱいだったはずですよね？

一年に一度、そんな気持ちを思い出すのがバレンタインデーなのではないでしょうか。

大事な人のためにお菓子を作ったり、伝えたい気持ち

を抱えてチョコレートやプレゼントを選んだり、はたまた遠くなった日々を、ほろ苦い思いで振り返ったり……。

私の妄言から始まった今回の企画ですが、思いがけずたくさんのお話が集まりました。

魔法に掛けられたような一日の、作家諸氏の夢の共演です。

願わくばあなたの心にも、聖ヴァレンティヌスの祝福がありますように。

正しい恋のカタチ

タケノコノベルズ

Photo by 悠＆よぴー

はじめての

悠&よぴー

「買いたいものがあるの」

小学生の娘に連れられて近所のショッピングモールへやってきた。

明日はバレンタイン。専用のコーナーもでき、女の子達が真剣にチョコレートやラッピング、カードを選んでいる。娘も散々迷ったすえ可愛い箱とチョコレートキット、そしてカードを一枚選んできた。

「今月のおこづかいじゃ足りないの。来月の分から前借

りさせてください」

恐る恐る私に聞いてきた。

初めて好きな子に作ろうと思ったあのときの私と同じだ、あのとき母は笑いながら私にこう言ってたっけ。

「今回はお母さんが買ってあげる。そのかわり今月はお手伝いたくさんしてもらうわよ」

初恋自爆

水晶一輝

百円玉を握りしめて、近所の雑貨屋に走る。明日は好きな男の子にチョコあげて、好きって言う日だ。

この前見つけたハートチョコ、まだあるかな？　ピーナッツのいっぱい入った、可愛い大きなハート。

なんて言って渡そう？　大好き！　かな。大きくなったらお嫁さんにしてって言おうかな？

おつりの四十円で可愛い折り紙を買って、きれいに包む。

お母さんが「誰にあげるの？」って言うけど、秘密だ

もん！　喜んでくれるかな、好きって言ってくれるかな。

わくわくしながらお布団に入って、いつもより早く起きちゃったりして。髪も可愛く結んでもらったし、よし、行くぞ！

彼の顔が、いつもよりかっこよく見える。ほんとはお菓子とか持ってきちゃダメなんだけど、今日だけは許してくれるよね？　ドキドキしながら彼に話しかける。

あのね、んとね……。

「ブロックであそぼ！」

ダメだ、あたし。恥ずかしくて言えない！

そうだ、先生なら助けてくれるかも！

「先生、あのね」

一息ついて。

「先生、チョコあげる！」

もー、持ってきちゃダメでしょ、と言いながら、嬉しそうな先生の顔と、なんにも知らない彼の顔。

五歳の勇気は、そこで終わったのでした。

あの頃、友理さんが好きだった

高田公太

バレンタイン。

高熱を出して学校を休み寝込んでいた。

夕方、インターホンが鳴り、玄関口で母と同級生の女の子が話し合う声が聞こえた。

声だけでその娘が誰かすぐ分かった。玄関まで行くのが恥ずかしかったので寝ているふりをしておいた。

生まれて初めて、好きな娘からチョコを貰ったときの思い出です。

ありがとね

寺川智人

「時間空いてる？」

相変わらず唐突でぶっきらぼうな電話。

借りていたテープとお気に入りのテープをまとめると、いつもの場所へ。

長い階段を登り切った先にある、小さなスペース。

夜空には星座がくっきりと浮かんでいる。吐く息が白く、夜空へ立ち登る。

しばらくして、彼女がやってきた。

「いつもありがとね。この曲良かったよぉ」
そう言いながら、彼女が紙袋を差し出す。
「こっちも良かったよ。はい、新しいの入れておいた」
互いの紙袋を交換する。
「それじゃ」
「うん、また」
それだけの言葉を交わし、互いの家へ帰る。袋の中には幾つかのテープと貸していた詩集。
そしてその隅っこに、小さな包み。
緑色の包装紙には手紙が添えられていた。文章を辿る

と曲や詩集の感想など、彼女の言葉が無数に溢れ出す。

そして最後に一言、「いつもありがとね」。

包装紙の中には普通の板チョコ。

でも、そのときの二人の気持ちは同じだったと、過ぎてから思った。

ホットチョコレート

寺川智人

「ただいまー」

玄関から泉美のくたびれきった声がした。

その両手には大きなビニール袋。それを玄関先に投げ出して、彼女はローヒールを脱ぎ散らかし、俺の入っているこたつへとまっしぐらにやってきた。

ひんやりと冷え切った足先が触れる。

「おかえり。お疲れさん」

「あー寒い寒い」

ごろんと寝転がり、泉美はこたつの中で足をもぞもぞさせる。
「また恒例のあれ？」
「そう。毎年恒例のあれ」
そう言って彼女が指差したのは、玄関先に放置されたビニール袋。
「女子社員代表ってやつ？」
「そうそう。面倒くさいったらありゃしない」
こたつの向こう側から、はぁと大きな溜息が聞こえた。
「手作りのほうが喜ばれるだろ？」

「喜ぶだけでしょ？　ホワイトデーは出来合いのクッキーのお返しだし、チョコより安いじゃない。それに、手作りだと色々あるのよ」

妙に含みのある言い方だ。

「色々って、何だよ？」

「……女子の集団って、怖いわよ」

ちょっとトーンを落とした泉美の声でそう言われると、本当に怖い。

まあ、女子の集団が面倒くさくてドロドロしてるというのは、泉美から何度も聞かされてきてるから、大体の

想像は付く。

お気に入りの社員には凝ったものを、嫌いな社員には鼻くそやツバだって入れかねない。

そして、彼女達は抜け駆けを許さないのだ。

「ヘルプデスクは女子社員の伏魔殿、大奥でございます、だろ？」

「あんたねー、人ごとみたいに言わないでよ」

思いっきり脛を蹴られた。

そりゃそうだ。俺は一応、ヘルプデスクの室長ってことになってる。

だが実際の所は事務的なことだけで、メンバーの面倒は泉美が見ている。

「感謝してるよ。メシも作ってあるし」

「暖まったら食べる。うん、やっぱ大好き」

「何だそりゃ。メシがなけりゃ好きじゃないってか？」

「ううん。美味しいご飯を作ってくれる信ちゃんが好き」

「おいおい、それ否定になってないぞ」

俺は苦笑しながら、もぞもぞとこたつから出て立ち上がり、台所へ向かう。

「ああ、いいってば。私が自分で温めるから」

「いいよ。お前がまず温まれって」
こたつから出ようとする泉美の前に、コーヒーカップを差し出す。
「熱いから気を付けろよ」
「うわぁ……いい香り……」
彼女は仔犬のように鼻をひくひくさせて、カップから立ち上る香りを目一杯吸い込んでいる。
「ホットチョコレート、だよね。……もしかして、逆チョコ？」
泉美がにやにやと笑みを浮かべて俺を見上げる。

「うっさいなあ。たまにはいいだろ？」
「ありがと。でも、まだ一日早いよ」
「あのなあ」
俺は壁掛け時計を指差す。
針はとっくに零時を回っている。
「……あ……」
「お疲れ様」
「……ありがと」
泉美の視線は、両手で大事に持ったカップに注がれていた。

「ねえ」
「何？」
「これ、まだ余ってる？」
「ああ。おかわりならあるぞ」
泉美がゆっくり顔を上げる。
その顔にとても暖かい笑みを浮かべて、ちょっと恥ずかしそうに口を開いた。
「……ねえ、一緒に飲もう？」

本命

悠&よぴー

「はい。毎年恒例行事！　義理だよっ。三杯返し期待してるからっ」

そう言ってチョコを突き出した。

「さんきゅー」

そう言ってにこっと笑った笑顔にドキッとする。

彼の鞄の中にはたくさんの女の子から貰ったチョコ。

幼馴染の私のほうがずっと前から好きだったもん。

本当は本命なんだからねっ！

大きな義理

菊地順

商店街の隅のお菓子屋さん。

バレンタインのチョコレートもハート型とか並べてあって。ネームやメッセージを入れるって言うサービスもやってくれる。

ドキドキしながら一番大きなハートのチョコレートを選んで。大きい文字で「義理」って書いてもらった。

本当は、義理でも友チョコでもなく、本命なんだけど。

回りにばれたら、きっと困るのは……って思って書い

たメッセージ。
手渡したら、すぐに中を見て、くすくすって笑いながら「随分と大きな義理だね」って言って、キスをくれた。

ここにいること

Ｚｅｒｏ

「ありがとう。一緒に食べようか」

無造作にべりべりと剥がされるラッピング。

同じものを食べられる、今ここに一緒にいられる喜び。

部屋に持ち帰ってもらうことのできなかった、飾られた心。

……あなたから貰ったものは、包装紙も、リボンすらも捨てられないのに。

嬉しくて、悔しくて、苦い。

日付と距離を越えて

ひょーじ

あと二分で十五日、というところで携帯が鳴る。

『ごめん、今作ったから写真だけ送るね！　明日冷蔵便で送るから！』

遠距離恋愛の彼女からのメールには、手を合わせて拝むような姿の本人と、ちょっぴり歪な生チョコレートの写真が添付されていた。

いじわるハニィ

玉置真珠

「ねえこれ、マナから貰ったの。余り物だけど」
「ボンボン？」
私は金と赤の包み紙を剥いて口に含む。
「馬鹿、すぐ酔うくせに」
彼の顔が近づいてきた。
やだやめてよ、赤くなるったら。

ごっこ

神沼三平太

「チョコは？」
「あげない」
「何で」
「理由なんてないよ。あげない。いいじゃん。チョコぐらい」
「寂しいなぁ」
「勝手に寂しがってれば」
「何だよその言い方」

「あんたこそチョコ作るの失敗した？　ぐらい言いなさい」
「本当はどうなの？」
「察しなさい。帰るまでチョコあげないごっこよ」

上手

神沼三平太

「どうぞ」
「え、何」
「チョコ好きでしょ。バレンタインだし。普段買えないようなの色々売ってるから迷っちゃってさ」
「えー、高いじゃん！」
「鞄にチョコの箱入ってるでしょ？」
「え。あるよ。あるけどさ！　何よそれ！　……やっぱりあげないっ」

「うん。だからこっちに一緒に食べる用もあるよ」

なまもの

神沼三平太

「さぁ、これがバレンタインのプレゼント」
「……何これ」
「お菓子のお屋敷」
「見りゃ分かるよ」
「食べてね。今すぐ」
「こんなに食えるかよ！」
「愛があるなら食べられるはずよ」
「……食うよ食うよ」

「で、タイムリミットはねー」
「タイムリミットあるのかよ！」
「生チョコだからねっ！」

ニブチン

サデスパー堀野

中学生のとき、バレンタインデーに自宅で過ごしていると、チャイムが鳴った。

玄関を開けると、同じクラスの女子が立っていて、小さめな袋を手渡してくれた。

わざわざ来てくれたのかと思うと、僕はドキドキが止まらなかった。

おもむろに袋を開ける……ビックリマンが出てきた。

僕のきゅん消滅。

過剰包装

サデスパー堀野

チョコ好きの僕にとって、この時期は美味いチョコが食えるので、割と特設売り場に行くことがある。

その日も僕は女子に紛れてレジに並んだ。

事務的な流れ作業の中、店員は僕のチョコもバレンタイン用にラッピングする。

自分用としては明らかに過剰包装……何か知らんが僕はそれを妹にあげた。

悲しき同人屋

サデスパー堀野

そぼ降る雨の中、好意を持っていた女子と傘を差しながら帰る。

だいぶ周囲は暗く、お互いの顔もよく見えないまま、僕はなにげにチョコを渡され、ドキドキしながら「ありがとう」と言った。

何か言葉を続けたかった。

でも何も口から出てこない。

思考回路が急にバーストしていく。

……しばしの沈黙の後、バーストした思考回路の僕は、何故か急にあることを思い出した。

「あ、来週同人誌即売会なのに何も準備していない！」

……急にテンパった僕は、

「ごめん、今日はこれで！」

と言って、すぐに仲間の元に駆けつけて原稿を書いていた。

間違いなく、僕はバカだ。

バレンタインの夜

もけたろう

高校の頃。俺達の輪の中に、自然に溶け込む女子がいた。明るい笑顔とサバサバした性格に、いつしか恋心を抱いていた。

しかし、その関係性を壊す勇気が持てない俺は沈黙を守り、相変わらずな日々を過ごすだけだった。

そのまま俺達は卒業し、会えないままに五年の月日が流れた。

「あれ？　徹!?」

仕事帰りに通りを歩いていると、呼び止める声がする。
振り向いた先にいたのは、元クラスメートの順子だった。折角だからと近くのバーに立ち寄り、昔話に花を咲かせる。
「そういえば、何であんた達、付き合わなかったの？」
その質問に、グラスの傾きが止まった。
「多香子よ、多香子！」
順子は酒の勢いも手伝ってか、随分と饒舌（じょうぜつ）だった。
そして知ったことは、多香子と俺は両思いだったこと。
俺と話がしたくて、男の輪の中に無理をして入ってい

たこと。

――昨年、交通事故で亡くなっていたこと。

そのあとは、酒を浴びるように飲んだ。

俺の反応で気付いたのか、順子は何も言わずに付き合って飲み続けてくれた。

覚えていることは、ソルティドッグの塩が、やけに苦く感じられたこと。そして、頬を滴が流れたこと。

そんなバレンタインの夜だった。

葬恋

もりか

バレンタインデーに結婚式を挙げるのが夢だという花嫁のために、この日を選んだのだと彼は言った。

いにしえの聖人にちなんだ愛の日に、たくさんの人々に祝福されて、彼もその花嫁も耀（かがや）いている。

気持ちを隠したまま参列する私にその笑顔は眩（まぶ）しすぎるけれど、思ったよりもずっと穏やかな時間は淡々と流れてゆく。

十年前の今日、彼に想いを告げた。

そして……気持ちは受け入れられなかった。
それでも、赦された友人としての立ち位置を諦められるほど大人でもなかった。
こうして彼の結婚式に参列する日がくるなんて、想像もしなかったけれど……恋人達を祝福したために処刑された聖人にちなむこの日、私もこの気持ちを葬る。
降り積もる思い出は、甘く、苦く、いつも微かな痛みを伴う。
だから彼の笑顔を最後の形見に、もう終わらせよう。
おめでとう。

——さよなら。

今日だけ

加藤一

大病を患い節制を始めたはずの夫が、

「しょうがねえだろ」

と目尻を下げる。

娘からのチョコを独占できるのなんて、今のうちだけなんだから——。

そう言われたら、立つ瀬がないじゃないの。

あなたの笑顔が見たくて

悠&よぴー

毎年、夫は二月十四日になると大量のチョコを貰ってきた。

人当たりも良く、出張の際は必ず皆にお土産を買ってきたりとマメな性格もあってか、社内でも人気があるらしい。

まぁ、大量のチョコも帰宅すると待ち構えている子供達にほとんど取られてしまうのだけれども……。

そんな夫が、去年定年退職した。

「今までずっと働いてたからのんびりしないとな」
特に趣味も持たなかった夫は私達がパートや学校に行っているあいだ、ぼんやりとテレビを見たり散歩をして過ごしているようだ。
仕事という生きがいを失った夫は何だか急に老けたようにも見える。
少しでも喜んでもらいたい。
「今年は夫に手作りチョコをあげよう」
ふと思った。
夫にチョコなんて何年振り、手作りなんて何十年振り

だろう。

トリュフか、クッキーか……いや初めてのバレンタインにあげたのと同じ、チョコレートケーキもいいかもしれない。

喜ぶ夫の顔を想像しながら製菓コーナーへ向かった。

いつもの

加藤一

「はい、これ」

スーパーのチラシが入ったまま、包装も何もなく放り出されたチョコ。

いつものリンツとゴディバ・パールズ。

もう何十年も、おざなりに繰り返される時候の挨拶。

「ホワイトチョコが好きなんだよね」

遙か昔、付き合っていた頃の何気ない一言を、妻は今も律儀に覚えてくれている。

また来年

かずぷー

「ああ、もう！」

マキは散らかったキッチンでいらだっていた。

「早く学校行きなさい。遅刻よ！」

母親の怒声が飛び、マキは追い出されるように家を出た。登校途中、友人のクミに冷やかされる。

「うそ！　チョコ、間に合わなかったわけ!?」

「……うん」

「ありえない！」

（日頃、料理すらしたことがないのに、いきなり手作りチョコレートなんて無理だったか。売ってるのを買えば良かった）

マキは自分の浅はかさを呪った。

（でも。でも、どうしても手作りのを手渡したかった……）

校門をくぐると偶然、ナオヤとはち合わせした。

マキが手作りチョコレートを渡したかった相手だ。

「ねえねえ、ナオヤ。マキさあ、チョコ失敗したんだって！」

（え、うそ!?　ちょっと！）

クミのお喋りは一旦始まると止まらない。
「失敗？」
「マキね、ナオヤに手作りチョコを渡そうとしてたんだよ！」
「ちょっと、何言ってんの！」
ナオヤは眉間に皺を寄せ、マキを見つめた。
「でもね、間に合わなかったんだって」
（この人、言っちゃったよ！）
「うまく作れなくて、間に合わなかったんだって！」
マキはいきなり友人に自分の恋心を告白されてしまい、

もはや赤面したまま俯くことしかできなかった。
クミは能天気な笑顔を浮かべ、マキとナオヤは押し黙って俯き、しばし沈黙の時間が流れた。
「間に合わなかったのか？」
ナオヤが沈黙を破った。
「う……うん」
カラカラになった喉を振り絞り、マキが答える。再び沈黙。そして……。
「じゃあ、待つよ」
「……え？」

「俺、来年まで待つから」

マキはあの後、どんな会話をしたのかまったく覚えていない。

ただ、ナオヤが一緒に帰ろうと誘ってくれたことだけは、はっきりと覚えている。

結局、マキはその日一日、ぼうっとした気分のまま、授業を受けた。ぼうっとしながら時々、来年作るチョコレートのことを考えた。

乙女の恋

水晶箱

Photo by 悠＆よぴー

ガトーショコラ

悠&よぴー

友人のAちゃんは女子の硬式野球部に入ってて、先輩・後輩にモテていた。面倒くさがりでそっけない彼女は休み時間はずっと寝てたりでめったに教室から出てこず、手紙の受け取りなどは私が代理で貰っていた。

ある二月十四日のお昼休み、彼女の後輩のMちゃんがお菓子を持ってきて、私にくれた。

「ありがとう。Aちゃんに渡しておけばいいのね」

私が言うと、

「いえ、これ二人で一緒に食べてください」

と言われた。

Aちゃんのとこへ戻り、

「これ、Mちゃんがくれたよ。一緒に食べてだって」

「そうなの？　じゃあ今食べちゃおう！　美味しそうだねー」

貰ったガトーショコラは美味しかったです。

となり

寺川智人

一年目は驚き、二年目は馴れて、高校生活最後の三年目ともなると、ちょっと切ない気持ちになる光景だ。

下駄箱にぶら下がった、袋いっぱいのチョコレート。

それをひょいと掴んで肩に担ぐ彼女の姿は、呆れるほど様になっていた。

表情もいつも通り、何を考えてるんだか分からない、もしかしたら何も考えてないんじゃないかってくらい、平然としてる。

「何ぼーっとしてんの、行くよ」
「え？　あ、うん」
あんたが言うな、と思いながら、すたすた歩き始める彼女の後ろについて歩く。
背後から黄色い声がする。その声は私の存在など通り越して、彼女に投げかけられている。
いつもの下校風景だ。
私も、彼女を中心とした風景のひとつに過ぎない。
家が隣同士、幼稚園も一緒、エスカレーター式の私学にも一緒に入り、いつも一緒に登下校をして。

それが当たり前になって。
……当たり前、か。
それも今年で最後。
私はこのままエスカレーターに乗って大学に行く。でも彼女は都心の美大へ進む道を選んだ。
当たり前のことだけど、私達はそれぞれの人生を生きてる。
そう……当たり前。
「どうしたの？」
彼女が立ち止まり、心配そうに私の顔を覗き込む。

距離が……近い。

「あ、ううん、何でもない」

「あっそ」

彼女はそう言うと向き直り、すたすたと歩いていく。

長くて短い帰り道。

もちろん今日が最後じゃない。だけど、今日は。

鞄の中にある私の思いはぎゅっと身を縮め、息を潜めたままだ。

このまま目立たないように、ずっと、このまま……なんだろうか。

いつも通りの帰り道。長くて短い帰り道。
そして、あっという間に家の前。
隣同士並んだ家。
隣同士だけど、それぞれ違う家。
彼女は彼女の家に帰るんだ。
私も私の家に。
それで今日はおしまい。
そして来月には、その当たり前もおしまい。
……このままで、いいの？　足が止まる。止まるけど、
それだけ。

どうすることもできない。

「おい、悠子」

彼女が私の顔を覗き込む。そして、私の鞄をひったくる。

「隠しても無駄だよ、全部顔に出てる」

「ちょっと、何を……」

「ほら、あった」

彼女の手には、私の気持ちが乗っかっていた。

「手作りだ。猫の形か」

じっくり舐め回すように、彼女は小さな包みの中を見ている。

「悠介、猫が好きだって言ってたから」
「……その呼び方、やめろよ」
彼女……悠介が怒った。
いつからだろう。男っぽい彼女が悠介と呼ばれ、なよなとした私が悠子と呼ばれるようになったのは。
「……じゃあ、私のことも悠子って呼ばないで」
「ん……悪かった」
彼女がそっぽを向いて謝る。気まずいときのいつもの癖だ。
「それより、これはあたしが貰ってもいいんだよね？」
「……うん」

閉じこもっていた気持ちが、彼女に導かれて自然に出た。
「ずっとくれないからさ、どうしようかと思ったよ」
「何で分かったの？」
「台所、ずっと電気が付いてたろ？」
「そっか」
思わず吹き出してしまう。隣同士だもんね。筒抜けだよね。
「学校に入ってからずーっとくれなくなったな。何で？」
「だって、他のと一緒になっちゃうし……」
そう。彼女がぶら下げた袋。あの中のひとつにはした

くなかった。
それに、目立ちたくもなかった。
怖かった。
「一緒になんかするわけないだろ？」
「だって、今年だってそうやって大事に持って帰ってきてるし……」
「じゃあ捨てようか？」
彼女が袋を放り出す仕草をしてみせる。
「ダメっ！　あの子達の気持ちなんだから！」
「そう言うと思ったから、きちんと筋を通してるんだよ」

筋を通すため、お断りの文章を書く手伝いをしたのを覚えてる。

「……うん。だけど、納得いかない」

「何が？」

私のチョコを食べながら、彼女が聞き返してくる。

やっぱり気付いてない。

「あなただって女の子じゃない」

「ああっ！」

……やっぱり悠介よ、あなた。

「何だ、あたしのチョコが欲しかったのか。そっかそっか」

「そっかそっかじゃないでしょ？」
「まいったなぁ。手持ちもないし……」
小首をかしげながら、彼女が近づく。
そして小鳥のような口づけ。
ほんのりと甘い香りが唇に残る。
……って、ええっ!?
「はい、プレゼント。じゃあ、来月期待してるから！」
呆然と立ち尽くす私を残して、彼女は玄関へと向かう。
その足が止まり、くるりと私のほうに向き直る。
「愛してるよ、悠」

そう言って彼女……もう一人の悠は扉の向こうへ消えた。
耳に心地よい響きが残る。
あれ？　でも、ちょっと待って？
確か彼女『来月期待してるから！』とか言わなかった？
来月も私から貰う気？
くれるつもりはないわけ？
……悠介の莫迦（ばか）っ！

パーティ

もりか

「予定のない子達だけでお茶しない？」

誘われたのは偶然だった。

料理持ち寄りの女子会は、寮の集会室で行われるという。テスト明けの放課後、初めて訪れる女子寮に少しだけ緊張しながら、私は門をくぐる。

集会室の一角、ありえない人の姿を見つけて、一瞬呼吸が止まった。同じクラスの憧れの彼女。大人っぽい外見通りに、社会人の彼氏がいると聞いていた。

だから私の想いなど、芽吹くことさえかなわずに朽ちてゆくのだと、自分の境遇を呪っていたのに……。

けれど彼女は静かに微笑みながら、確かにそこにいた。

今日の企画は「バレンタインデーに予定のない女子の茶話会」だよね？　ということは、そういう事なのだと理解してもいいのだろうか……優雅な仕草でお茶を淹れる彼女に見とれながら、そんなことを考えた。

彼女が手ずから淹れてくれた紅茶が、繊細なカップでみんなに配られる。

口を付けて驚いた。

「これ……チョコレートの香り？」

思わずこぼれた言葉に、彼女がにっこりと笑った。

「私達の友情に」

彼女の声が甘い香りを纏(まと)って、心まで染みこんできた。

切ない変

単一嫌ナ話

Drawing by 近藤宗臣

お見通し

黒実操

チョコ売り場でレジ待ち。私は最後尾。

「プレゼントですか？」

「はい」

何人もの娘さんがはにかむ。

微笑ましく見守っていると、順番が巡ってきた。

「ご自宅用ですね」

「……！」

台詞が違う。

しかも「ね」ときた。

「ね」。

せめてそこは社交辞令として「か？」でお願いしたい。

切に切に。

人は――たった一言で心を殺される。

お見通し2

菊地順

バレンタイン近くになると、デパートのお酒売り場もそこはかとなくピンクに染まる。

レジ待ちをしていた私。

やっと順番が回ってきてカウンターに乗せるとすかさず「ご自宅用ですね」今までと台詞が違う。

バレンタイン仕様のワインと日本酒なのに……。

見栄を張り、ラッピングを頼んだ。

おどろの戀

怪集

SATANIC VALENTINE 2011

Drawing by 近藤宗臣

僕の種

藍明

数年前のバレンタイン、出勤すると私宛てで差出人不明の小包が届いていた。

まさか爆発物？　なんて同僚と笑いながら耳を箱に押し付けたりして、おどけながらガムテープを剥がして、中身を取り出した。

すると、手作りなのか、ラッピング用の可愛い花柄の箱が入っている。

蓋を開けると、溶けかかった、歪な凹凸が付いたトリュ

フチョコレートがアルミの台紙に包まれている。
手紙も添えられていたから、誰からなのか、食べる前に読もうかなってそれも開いてみた。
食べる前で良かった、と私は心からそう感じた。
真っ白な封筒にしまわれたメッセージカードには、むわんと栗の花のような、生臭い匂いが染み付いていたのだ。
カードには、こう書かれていた。
『僕の種を受け取って、宿してください。』
おまじないで髪の毛入れるとか、爪を入れるとか色々黒魔術みたいなやり方して、好きな男子にニッコリして

渡してたコもいたけど、まさか自分がそんな目に遭うなんて思わない。

しかも、作ったヤツはどうして私がこの会社に勤めているのを知っているんだろうか。

段々怖くなる。

誰かも分からないし、僕の種を宿してくださいなんて……吐き気で胃がせり上がる。

私は百均で買ったゴム手袋をはめて、近くにあるゴミ集積所にそれを投げる捨てた。

もちろん、手袋も一緒に。

今年は、マンションの郵便受けにトリュフチョコレートがぎゅうぎゅう詰めにされたビニール袋が入れてあった。

やっぱり手紙も一緒に入っていて、前より多めに混ぜましたなんて書いてある。

もう引っ越すしかないのかな——と、私は黙って郵便受けの蓋を閉じた。

Love or Die

深川拓

放課後、プリントの整理を任され、黙々と手を動かしていたとき。

「チョコに毒を入れてプレゼントする女の子って、いるかね」

波奈のその一言に、陸はしばし絶句した。

「……恨んでる相手に、恋してる風を装って、チョコをあげんの？」

「本気で憎いならやると思うよ、女の子は。全力で演じて、

本気だ、って信じこませて、食べた瞬間に嘲笑ってやるの」
「おっかないこと考えるな、女は――って言うか、波奈は」
「陸は知ってるじゃん。あたし、そういうタイプよ」
「……ああ、知ってる」
何カ月か前までの波奈の振る舞い、というより攻撃に晒(さら)されていた自分の姿を脳裏に蘇(よみがえ)らせて、陸は顔をしかめる。
「ね、あんたはどう？　そういう関係の女の子に、いきなり『実はぁ、あなたのことが、大好きだったの！　だからこれ、食べて？』ってチョコ差し出されたら、受け

取る？　食べる？」
「演技が気持ち悪いよ」
「あたしの演技はどうでもいいから、答えろ」
ぎろ、と睨まれて、陸は本気で思案した。頭の中で手短にシミュレーションをして、答える。
「……いきなりじゃ、食べんな」
「……へぇ。あんたみたいに縁のない奴なら、飛びつきそうだけど？」
「縁がないのは否定しないけど、だったら尚更だろ。だって、相手は自分のこと憎んだり恨んだりしてる女の子な

んだろ？　昔からそれなりに付き合いがあれば、こいつ自分のこと嫌ってるな、ぐらいは分かるって。そしたら、幾ら好きです好きです、心からー、とか言われたって、多少は勘繰るって」

「あんただからでしょ？　昔から、少しぐらいは用心深いみたいだから」

「……波奈の底意地の悪い罠に何回も引っ掛かったせいだよ」

「あっはっは」

陸の嫌味に、波奈は空虚な笑いで切り返した。

「じゃ、初対面の女の子に、いきなり」

問いかけようとして、不意に波奈は言葉に詰まる。少し視線をさまよわせた後、

「さっきみたいなこと言われたら、受け取る？」

「んー……受け取るぐらいはするかもしれないけど、食べるのはちょっと気を遣うと思うぞ。それこそ、引く手あまた、ってぐらいチョコを貰いまくってるモテ男だったら疑いもしないで食べるか……」

そこまで言ったところで、別の可能性に思い至って、陸は眉を顰（ひそ）める。

「いや、そんなに貰ってんだったら、全然関心のない娘のチョコなんか、食べないか……良くても、人にあげるぐらいするかもな。どっちにしても、やっぱりチョコに毒盛っても、食べさせるのは難しいだろ」

「じゃあ、どうしてもバレンタインに、あげたチョコ食べさせて殺したい――」

「もうちょっと穏当な表現にしないか？　それ」

「――目を回すところが見たい、って計画してたとしたら、どうするのがいいと思う？」

「どうしても、ねぇ……。女の子の目的が確実に相手を

仕留めることにあんなら、もっと周到に近づかなきゃ駄目じゃないか？　もっと早い時期から、親しくなるとか、ぎこちない関係を修復するとかして、バレンタインまでに自然な会話ができる関係になっておいて、『実は……』ってチョコを差し出す。そのくらい計画的にやって、ようやく確実に仕留められるんじゃないかな」

仕事を放り出していったい何の話をしてるんだ、と訝りつつ、陸はそう結論づけた。

正面に座った波奈は、背もたれに深々と身を委ね、妙に表情の乏しい瞳で陸を見つめる。陸が不安を覚えた頃

に、ようやく言った。
「……ってことは、陸は、自分が好きな相手じゃなきゃ、怖くて受け取れないよね」
「それは……極端だけど、今みたいな話、したあとじゃなぁ……」
「本当に、拒絶する？」
重ねて訊ねられて、陸は口をつぐむ。
「そこまで一所懸命、親しくなろうとしてたらさ……きっと、相手のいいところとか、好きになれる部分、探すと思うのよ。そうやって、いいところ、好きになれるとこ

ろばかり、目に入れるように努力してたら……本気になる、ってこと、考えられない？」

「……でも、それは幾ら何でも、受け取るほうでそんな想像はできないだろ。あまりにも、希望的観測が行きすぎてる、って言うか……自惚れすぎてる、って言うか」

「考えられない？　そこまで予想するのは、無理？」

「まあ、普通はそうだろ」

「でも、今なら考えられるよね？」

いつになく真剣な調子で問われた陸は、まるで操られるような心地で頷いた。

波奈が、小さく頷き返す。それから、机の下の鞄に手を突っ込み、掴んだものを机の上に置く。

巾着状に何かを包み、赤いリボンで飾った掌大のものを、そ、っと陸のほうに押し出すと、波奈は瞳を潤ませ、目のふちを火照らせて、絞り出すように言った。

「……食べて」

ちよごれいとお

黒実操

ひとつ溶かして彼のため。
ひとつ固めてあの人のため。好き好き好きすきすぅき。
すぅぅぅ、き。

どろどろどろどろどろりどろり。かき混ぜる。チョコレートを作るの。可愛いハートの形なの。心を込めて、込めて込めて込めて込めて、作るの。
真面目なおまじない。遊びじゃない。女の子雑誌に載ってるような、生半可な遊びじゃないの。

八熱地獄の真火と三途の川の水で湯煎して、虚無の部屋でテンパリング。仕上げは、八寒地獄の真氷で固めるの。ね。遊びじゃないの。

なのに何故？　ハートの形が崩れちゃう。

やり直し！

まだまだ心が足りないわ！

ひとつ溶かして彼のため。

ひとつ固めてあの人のため。

私の想いは届かない。

まだまだまだまだ、届かない。

――こんなんじゃ、ダメ！　心を込めるの。スキスキスキスキダイスキダイスキ大好きだいすきだいすき。

ボウルの中で、どろどろうねる、黒と赤とのマーブル模様。

そろそろ、また、冷やそうかな。

ひとつ溶かして彼のため。

ひとつ固めてあの人のため。

幾夜、涙で泣き濡れて、眠れぬまま昇る朝日を憎んだことか。

彼は来ない彼は来ない彼は来ないあの人はいないあの

人なんていないあのひとなんて本当はいないのよ。
なんてね。
ねぇ。あのひとって、だれ。
嘘よ。
さて、また温めましょう。
ひとつ溶かして彼のため。
ひとつ固めてあの人のため。
チョコレートを作るの。あの日から、あの夜から、私はチョコレートを作り続ける。
作っても作っても歪な形。溶かして固めて溶かして固

めて溶かして固めて。
ひとつ溶かして彼のため。
ひとつ固めてあの人のため。
すぅ、き。す、き。すき。

熱い想い

黒実操

意識が戻ると同時に、鼻腔にチョコレートとコーヒーの香り。一瞬遅れて後頭部の痛み。身体が動かない。

「目が覚めた？　待っててね」

女の声だ。首さえ動かない。

無理に目線を下に向けると、どうやら布団巻きにされているらしい。

髪を引っ張る痛みから察するに、頭も固定されているようだ。

「あの、これはどういう」

あまりの異常事態に、僕は間抜けな声を出す。

できるだけ刺激しないように、優しく言ったつもりではあるけど。

「チョコレートを食べてもらいたくてッ」キャハッ。

可愛く笑った。その声に聞き覚えはない。

「ずッと好きだッたんですん」もう一度、キャハッ。

「あの、それは、どうも……」

状況が飲み込めない。

「でーきたッ」

カチッと音がした。ガスの火を消した音らしい。
「あのね、私、あなたのことを愛しちゃッたんでッ。たくさん調べたの。コーヒーが好きなんだよね」
こっちに来る。
僕は、もがく。戒(いまし)めはまったく緩まない。
「今日はーバレンタインデーなので、私から手作りチョコを捧げちゃいますッ」キャハッ。
僕は、もがく。
頭皮がビリビリする。緩まない。
「私、ずーっと好きだったんですよッ。だから、この想

いをちゃんと分かッてほしくッて。正確にきちんと寸分違わず伝えたくッて、頑張っちゃいましたん」

「そ、それはどうもありがとう。でもまずその前に解(ほど)いてくれないかな。これじゃろくに話も」

「食べたら伝わるよッ。召し上がれ。私の想いと同じ熱さのチョコレートドリンクん」

僕は慌てて口を閉じた。女が鍋を片手に覆い被さってくる。

「コーヒー好きでよかッたよん。チョコだけ煮たら、もろもろになッちゃうんだよ、知ッてた？」キャハッ。

僕は歯を食い縛る。
――女が鼻を抓(つま)んだ。

後悔

ねこや堂

「はい、お父さん」

妻ははにかむように笑った。返事はない。今年もこうしてチョコレートを贈る。仏壇に供えられた小さな包みの横で、写真の中の夫は穏やかに微笑んでいる。

「寂しいね」

妻はぼそりと呟いた。

「こんなに寂しいのなら、殺さなければ良かった」

Sweet & Tweet

きゅん。

僕らのラヴ

Painting by ひょーじ

静想

有川憂

放課後の図書室。
いつも彼が座っていた窓際の特等席は、空いている。
彼の読んだ本をすぐ後に借りるため、図書委員になった。
彼はこの本をどう思ったろう？　好きかな、嫌いかな。
そんなふうに思いをはせるだけで、胸がいっぱいになって、時々涙が溢れた。
夕日を受けて飴色に染まる背もたれにそっと触れても、彼の温もりはもうない。

バレンタインの前に、転校してしまうなんて。
勇気を振り絞れるかもしれない、そんなチャンスもくれないなんて。
「ずるいよね……」
ううん、違う。ずるいのは、言い訳をする自分だ。
知っていたら、勇気を出せたかもしれないのに。
知っていても、何もできなかったろうか。
想いは静かに本の森の中、幾重にも重なって積もっていく。いつか、思い出になる日まで。

ソフトクリーム・番外編

水澤純

バレンタイン商戦で、デパートの売り場はチョコレートだけに限らずどこも女性客で溢れかえっている。

「……どうしよう」

こんなところで男一人がプレゼントの買い物なんて、きっと変に思われる。カズは途方に暮れた。

二月十三日。それは恋人の誕生日。

プレゼントを探しに来ただけなのに。

プレゼントはネクタイにしようと決めていた。

しかし、紳士服売り場もご多分に漏れず女性だらけ。店員もカズには見向きもしない。

もっと早くに買っておけば良かったと後悔しても始まらない。

日曜日の今夜、会う約束をしているのに手ぶらで行かなければならないのかと思うと気持ちが沈んだ。

諦めて帰ろうとエレベーターに向かったら、

「カズさん」

と声を掛けられた。

振り向くとホリが笑いながら歩いてくる。

「ホリさん、どうして？」
「チョコを買いに来たんだよ」
「チョコ？」
「明日、バレンタインだろ」
「えっ？　誰に……」
「カズさんにだよ」
屈託なく笑うホリに、カズの胸が熱くなる。
「……俺達、男同士だよ？」
「だから？」
「だからって……」

カズは面映(おもはゆ)そうに睫毛(まつげ)を伏せた。

「カズさん、知ってる？　アメリカではね、バレンタインは恋人同士がお互いにプレゼントを贈りあうんだよ」

ハッとしてカズは顔をあげた。

「ほんと？」

「ほんとだよ。だから恥ずかしがらなくていいんだ」

「俺、ホリさんに誕生日のプレゼントを買おうと思ったんだけど、変に思われるんじゃないかって……」

「誰がどう思っても構わないよ。俺がカズさんに惚(ほ)れてるのはほんとのことだから」

じわっと涙が浮かんでくる。

「ありがとう、ホリさん。俺も、好き……」

カズは消え入るような声でそっと告げた。

ソフトクリーム・番外編

蒼弥

今日はホリくんの誕生日。

忙しくて誕生日プレゼントを買いに行く時間が取れなくて今日になってしまった。

でも街はピンク色に染まっている。バレンタインが明日にし迫っているのだ。

俺はどうしようか考えながらもピンク色に染まった場所へと足を進めた。目的場所はチョコとは違うけど。

色々見て回り彼に似合いそうなネクタイを見つけた。

バレンタイン用にラッピングできるとは書かれていたが……。俺がそれをしてもいいのだろうか？　そう思いながらもラッピングを頼んでしまった。

ついでのチョコも見ていくことにした。いろんな種類なチョコが並んでいる。

適当に選び、チョコを買いネクタイとチョコを持ってホリくんとの待ち合わせ場所に向かった。

街の大きなロータリーでの待ち合わせ。

人が多かったけどホリくんは意外とすんなりと見つかった。

「おまたせホリくん」
俺が声を掛けると
「こんばんわカズさん」
変わらない笑顔で答えてくれる。
「これ誕生日プレゼント。おめでとう」
俺は誕生日プレゼントを渡す。
「ありがとうございます」
ホリくんは嬉しそうに受け取ってくれる。俺は時計を見て日付が変わる頃もうひとつの袋をホリくんに差し出し、
「はい。ハッピーバレンタイン」

そう告げる。ホリくんは驚いた顔を見せたが、
「ありがとう。あ……。じゃあ僕からも、はい」
ホリくんは自分のカバンの中からピンクにラッピングされたチョコを差し出し言ってくる。
俺はそれを受け取り、
「ありがとう」
二人して同じこと考えてたなんて以心伝心だな。
「じゃあ、ご飯食べに行こうか」
俺はホリくんに貰ったチョコをカバンにしまい、聞いてみる。

ホリくんは、「はい」と嬉しそうに返事してくれる。
「じゃあ、いこ」
俺はホリくんの肩を抱き歩き出した。
行き先はいつもの居酒屋でいいよな。そう考えながら、
ホリくんと他愛もない会話を繰り返しつつ店に向かって
歩いていった。

いつもありがとう

蒼弥

この時期になると憂鬱（ゆううつ）になる。いつも女子高の連中にもみくちゃにされて仕方がないからだ。

本命の人間からしか貰いたくはない。

とは言え、俺の本命は同性だ。無理に決まっている。

だから毎年諦めているんだ。今年もそう決め込んでいた。あいつに呼び出されるまでは……。

「何の用だよ」

俺は約束の場所に行き既に待ってるあいつに声を掛け

た。あいつは俺を見ると挙動不審になった。
何でだ？？？
「用があるならはっきりしろよ」
俺はそう聞いてみる。奴は深呼吸をすると俺の前にピンクにラッピングされた箱を差し出し、
「智樹に俺からバレンタインデーのチョコ」
そう言われ驚く。貰えるなんて思ってなかったやつから貰えるんだから。
「夢？　それとも悪戯？」
信じ切れずそう聞いてしまう自分が情けない。

「違う。ずっと渡し損ねてたから今年は勇気出して渡そうと思ったんだよ」

はっきりと言われた。

「そっか。サンキュー。お返しは楽しみにしてろ」

俺は少し照れながらそのチョコを受け取る。

「いつもありがと。感謝の気持ちもこもってるからそれ」

直哉がテレながら言ってくる。

「そっか。うん。サンキュー」

俺はもう一度お礼を言う。

その後、二人で俺の家に行きチョコを食べた。

三人目のＫＩＮＧ

須藤安寿

美容室「モリリン」に勤めて三カ月。

一番下っ端のシャンプーボーイという立場から一歩も先へ進んでいないが、季之（としゆき）もようやく店に馴染み始めていた。

場所柄もあって、客のほとんどは出勤前に髪を整えるホストだ。「ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ」という店の専属みたいな雰囲気さえ漂っている。

別に男性専門の美容室……というわけではないはずだ。

だがホストが頻繁に出入りしていれば女性には入りにくいだろうし、自然に店のほうも男にとって居心地のいい場所になってしまうのだろう。入店以来、季之は一度だって女性客を見たことはない。スタッフも男ばかりだ。

「お湯かげんはいかがですか？」

シャンプーの泡を流しながら季之はそう声を掛ける。

「ああ、いい感じだよ」

顔に掛けたガーゼの下から眠そうな返事が返ってくる。

今接客中の相手は蓮司（れんじ）という名で、やはり『ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ』のホストだった。さっきからあく

びを連発し続けている。
「『ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ』のね、最後のＫＩＮＧが俺だよ。ヨロシク」
入店した初日。次々に来店する常連のホスト達に圧倒されていた季之がよほどおかしかったのだろう。
蓮司はいきなり顔を近づけて耳元でそう囁(ささや)いた。
今にも唇が耳朶(じだ)に触れそうな至近距離。
――それが出会いだ。
『ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ』のナンバー３。それはホストにとっては勲章のようなものなのだろう。当然、

女性客の心をくすぐるような扱いだって巧みに違いない。

季之をからかうように発せられたあの囁きも、その手管の延長線上にあるものだ。そのことが、季之には癪の種だった。

蓮司の言葉のひとつひとつ。表情の微かな動きにもどきどきとさせられる。そのことに気付いたのはいつだったろう？

蓮司の存在感をさらりと受け流すことができない。あの囁きの甘さを……心のどこかがいつも期待している。

その自分の、馬鹿丸出しの恋心が悔しくてたまらない。

ほとんど毎日のように蓮司の髪を洗っているけれど、別に何があるわけでもない。蓮司はいつも眠そうで、あくびばかりしている。

会話だって「お湯かげんはいかがですか？」「悪くないよ」とかなんとか、まごうことなきテンプレの繰り返しだ。季之はシャンプー台の一部みたいなものだろう。

「ユキちゃん、今日はデート？」

蓮司が唐突に言った。

季之の名前を覚えて声を掛けてくれる客は他にもいるが、そんな呼び方をするのは蓮司だけだ。

シャンプーのあいだ、客の顔にはガーゼを掛けているから、表情は分からない。言外に潜む意図を探ろうとして、思わず指が止まってしまった。

「ずっと仕事ですけど」

一拍遅れて、そう言葉を返す。

「バレンタインでしょ、今日。なのにデートもなし？ハードだね、美容師も」

「だって『ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ』のイベントは、うちの店のイベントでもあるんですから」

「あ……そっか。俺らのせいか」

そう言って、蓮司は笑った。

ホストクラブのバレンタインというのがどんなものなのか季之にはよく分からないが、店を上げての盛大なイベントが行われるという話は聞いている。

ショーでもやるのか、ホスト達の『お色直し』があると言われていた。季之も今日は夜が明けるまで残業決定という変則シフトだ。

「ユキちゃんのあたら若い青春が、俺らの犠牲になるなんて……申し訳ない気持ちになってくるなぁ。可哀想に」

蓮司はそう言って、また笑った。大げさな言葉を選ぶ

割に、罪悪感なんてこれっぽっちも感じられない軽口めいた言い方。それが何だか蓮司らしくて、かっこよくて、どきりとした。

「どうせ、デートする相手なんていませんから」

そう答えた口調は、いつもの『モリリン』のユキちゃんのものではなくなっていた。むき出しの季之の気持ちに震えている、拗ねた口調。

蓮司が顔の上のガーゼを自ら取り去って季之を見上げたのはそのときだった。

その動作に、季之は思わず「あっ」と声を上げそうに

なっていた。別に客を椅子に縛り付けているわけではないし、ガーゼはふわりと顔に乗せているだけだ。

客が自分の手でそれを払いのけたとしたって、何の不思議もない。それなのに季之には目の前で起こった事態が信じられなかった。

「ユキちゃんの言う〈相手〉ってさ、女？　それとも男？」

まっすぐに見つめられて、言葉を失った。ただまじまじと蓮司の顔を見つめ返してしまう。

「あ……いや、悪い、ごめん」

季之には自分がどんな顔をしているのかも分からな

かったが、蓮司は慌てふためいてそう言った。
「ごめんって、どうしてですか」
「えーと……」
珍しく蓮司が言葉を濁す。
「仲間内でそんな話が出たことあってさ……つい。ホントごめん」
もう洗髪は終わっていた。椅子を起こし、タオルで髪を拭いていく。手に馴染んだその動作をなぞりながら、季之は何だか泣きたい気持ちになっていた。
ホスト達の間で自分が話のネタにされているなんて、

季之は考えたこともなかった。蓮司の態度を見ればそれが上品な会話でなかったことは明白だ。

「俺……笑いものにされてる？」

「そうじゃないって。ただユキちゃんが可愛いから、みんなちょっかい出したがってるってだけで……」

蓮司は心底困り果てたという表情だった。季之が拭いている最中の頭をぼりぼりと掻く。ホストとして店に出ているときの蓮司なら、絶対に見せないだろう仕草だ。

「ただ男もＯＫならいいのになって、思っただけ。馬鹿にしたいわけじゃないし、無理矢理ヤりたいとか、そう

いう話でもないから」
「や……やりたい……って」
思わずそう問い返してしまう。耳まで真っ赤になっているのが自分でも分かった。
「季之、セット始めるから蓮司さんをご案内しろ」
店長からそう指示が飛んだ。何かトラブルだと思ったのかもしれない。
「は……はい！」
季之は弾き飛ばされるようにそう返事をした。
会話はそこでぶっつりと途切れてしまった。

シャンプー台からおりた蓮司を鏡の前に案内する。順番を待っていた若いホストが、携帯電話をいじりながらちらちらと蓮司と季之のほうを見ていた。

「蓮司さん、やるぅ」

言葉にこそ出さなかったが、その口がはやし立てるようにそう動いた。

明け方近く、ようやく店じまいの掃除を終えて、季之はバックヤードに戻った。先輩達が片付けを終えたあとに床を磨くのが季之の役目だったから、上がるのはいつも最後だ。

「季之、着替えたらちょっと来い」
店長がそう声を掛けてくる。険しい表情。多分……説教だろう。
「ホストの髪いじってたって、うちはホストクラブとは違うんだぞ、分かってるか、お前」
店長のオフィスに入るなり、そうまくし立てられて、季之は思わず身をすくめた。
「うちじゃ店外デートもアフターも世話してないから、勝手に自分で口説いて押し倒せと蓮司さんに言っとけ」
「……え？」

わけが分からず呆然とする季之の前に、店長は一枚の名刺を投げた。蓮司の……『ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ ＫＩＮＧ』ナンバー３の名刺だ。

「裏だよ、裏！」

イライラと急かす店長の言葉に名刺を裏返すと、走り書きの読み取りにくい文字で、携帯電話の番号が書き込まれていた。

「それはプライベートの番号だそうだ。後生だから電話してくれって、蓮司さんに拝まれたぞ」

「俺……どうすればいいですか」

「知・る・か！　そんなこと。一日遅れのチョコ持ってデートでもしてこい」

店長の声は心なしか剣呑さを増しているが、不機嫌というよりは呆れている感じだ。

「おい、そんなとこで目をうるうるさせんな。世の中浮かれきってるバレンタインに、仕事三昧の挙句、いい年した野郎同士の恥じらい合戦の橋渡しなんぞさせられる身にもなれ。だから嬉しそうな顔すんなって！　そんな面で店に出て他の連中までサカらすなよ。畜生、俺は独り身なんだぞ！」

義理と人情チョコレート

かずぷー

男は墓前にチョコレートを手向けた。

「義理だ」

墓石には、かつて男の舎弟だったチンピラの名が刻まれている。

男は毎年二月十四日になると、自分の盾になって命を落としたチンピラに、こうしてチョコレートを手向(たむ)けていた。

裏庭

もりか

大好きだったんだ。小さい頃からいつも一緒で、おねえちゃんみたいに優しくて。

「大きくなったらケッコンしようね」

って、滑り台の下で指切りした。折り紙がうまく折れない俺に、腕時計を作ってくれた。虫取りも、芋掘りも、遠足のときには手を繋いで歩いた。

だからこんな日が来るんて、考えたこともなかったんだ……。教室は、やけにざわざわしていた。朝自習の前

の「読書の時間」になっても何だか落ち着かない。
「静かにしてください！」
と、いつもの声が響く。
学級委員の甲斐しのぶが自慢の髪を振り乱して「静かにしてください！」と繰り返した。
気のせいかいつもより声が大きいみたいだ。
『甲斐さんは誰にあげるんだろうね』
『え～、誰にもあげないんじゃないの？』
『でもうちのママが昨日デパートで見かけたって言ってたよ？』

『そうなんだ～』

前の席の女子二人が小さな声でしゃべっているのが聞こえてきた。甲斐がデパートにいたからって、何が「そうなんだ～」なのか分からない。

俺は手元の本を読むふりをしながら、ちらりと斜め前の席を見た。天然パーマの髪を耳の下で二つに結んだ頭が、少し右に傾いている。

本を読むときに右手で頬杖を突くのが、三浦あかりの癖だ。こんなにうるさい教室の中でも本に集中している。本が好きで、自分の読んだ本の話をするときは声が少

しだけ大きくなる。
あかりの部屋の本棚には、赤ちゃんのときに買ってもらった絵本から、大人が読むような難しい本までぎっしり詰まってる。
もの静かで優しいあかりも、あかりの部屋も、俺は大好きだった。でもいつからか一緒に遊ばなくなった。
きっかけが何だったのかなんて覚えていないけど、あかりも他の女子と一緒にいることが多くなったし。
何だか冷やかされそうで、意識しだしたら一緒にいられなくなった。あかりの家のおばさんは、たまに会うと

「また遊びにいらっしゃい」って言ってくれる。

俺も「はい」とは言うけれど、もう行くことはないんだろう。最近のあかりを見てると、そう思うんだ。

何が変わったのかは……分からない。

「騒いでないで真面目に本読みしろ～」

迫田先生がいつものように、出席簿のかどで頭を掻きながら教室に入ってくる。

くたびれたジャージにサンダル。女子は不潔～って言うけれど、俺は先生のこと嫌いじゃない。

「おーい、バレンタインだからってざわざわしすぎだろ、

日直～」

言われて初めて今日がバレンタインデーだと気付いた。朝からのこそこそ話はこれだったのか……。

あかりを見ると、となりの席の女子と顔を見合わせてくすくす笑っていた。気のせいか頬が微かに赤くなっている。あかりのこんな顔は知らない。そう、俺の知らない顔を、あかりは最近するようになった。

だからかもしれない、何だか遠くに行ってしまったようで寂しい。あかりはどう思っているんだろう。同じように寂しいと思っているんだろうか……。

折角のバレンタインデーも俺には関係なく、誰からも貰えないまま一日が終わった。まあ今日が何の日か忘れてたくらいだから仕方ないか。

昇降口で靴を履いていると、となりのクラスの四宮大樹が通りかかった。去年まで同じクラスだったから、顔を合わせたらしゃべることもある。

「今帰り？」

「四宮も？」

四宮は肩に掛けたスポーツバッグ以外に、手に紙袋を持っていた。

「今日は部活ないし、もう帰るよ」
そう言って紙袋を床に置いた拍子に、袋はパタリと倒れた。
紙袋からすべるように出てきたのは一枚のカードで、そこには見慣れた文字で「大好きです」と書かれている。
「これ……」
拾って四宮に渡すと、何だかバツの悪そうな顔をした。
「一応断ったんだけど」
慌てたような早口が、いつもの四宮らしくなかった。
「あかりから？」

俺がそう訊ねると、四宮は黙って頷いた。
そうなのか、と思った。あかりは四宮のことが好きだったんだ。
多分もう俺との約束も忘れてしまったんだろう。なんとなくそんな気はしていたけれど……そう思ったら、急に胸が苦しくなった。
緊張しすぎて具合が悪くなるときみたいに、心臓がドキドキする。
ずっと一緒にいたのに、大好きだったのに……鼻の奥がツンとして、泣きそうになるのが分かる。

泣くまいと歯を食い縛り、目をいっぱいに開いたけど駄目だった。

急いで俯くと、コンクリートの床にぽたぽたと黒いシミが幾つもできる。

そばを通りかかった女子が「何で泣いてんの？」と囁くのが聞こえた。

悔しくてもっと泣けてくる。

動くこともできずに、ただしゃくりあげそうになるのをこらえるしかなかった。

四宮はそんな俺の腕を掴むと、正門とは反対の裏庭に

連れていく。
　下校時刻を過ぎて、うさぎ小屋の周りには誰もいなかった。ヒマラヤスギの落ち葉を踏む音だけがサクサクと響く。そして足音が止まったと思ったら、肩掛けカバンごと、ぎゅうっと抱きしめられた。
　息が止まりそうなほど強く抱きしめられて、びっくりして涙も引っ込んでしまう。
「な……んだよ、離せよ」
　俺が言っても四宮は力を緩めない。段々俺がハグされてるんじゃなくて、四宮がひっついてるような気がして

きたくらいだ。
「三浦からチョコ貰ったときに」
四宮の声が、耳のすぐそばで聞こえる。
「こんなふうに泣くんじゃないかって思ったんだ。だから断った」
でも、とかすれた声は続いた。
「でも三浦を泣かせたら、お前が怒ると思って……。お前に嫌われたくないと思ったら断り切れなかった。お前が三浦のこと好きなの知ってたのに……ごめんな」
四宮は一気にそう言うと、やっと俺を離した。ちょっ

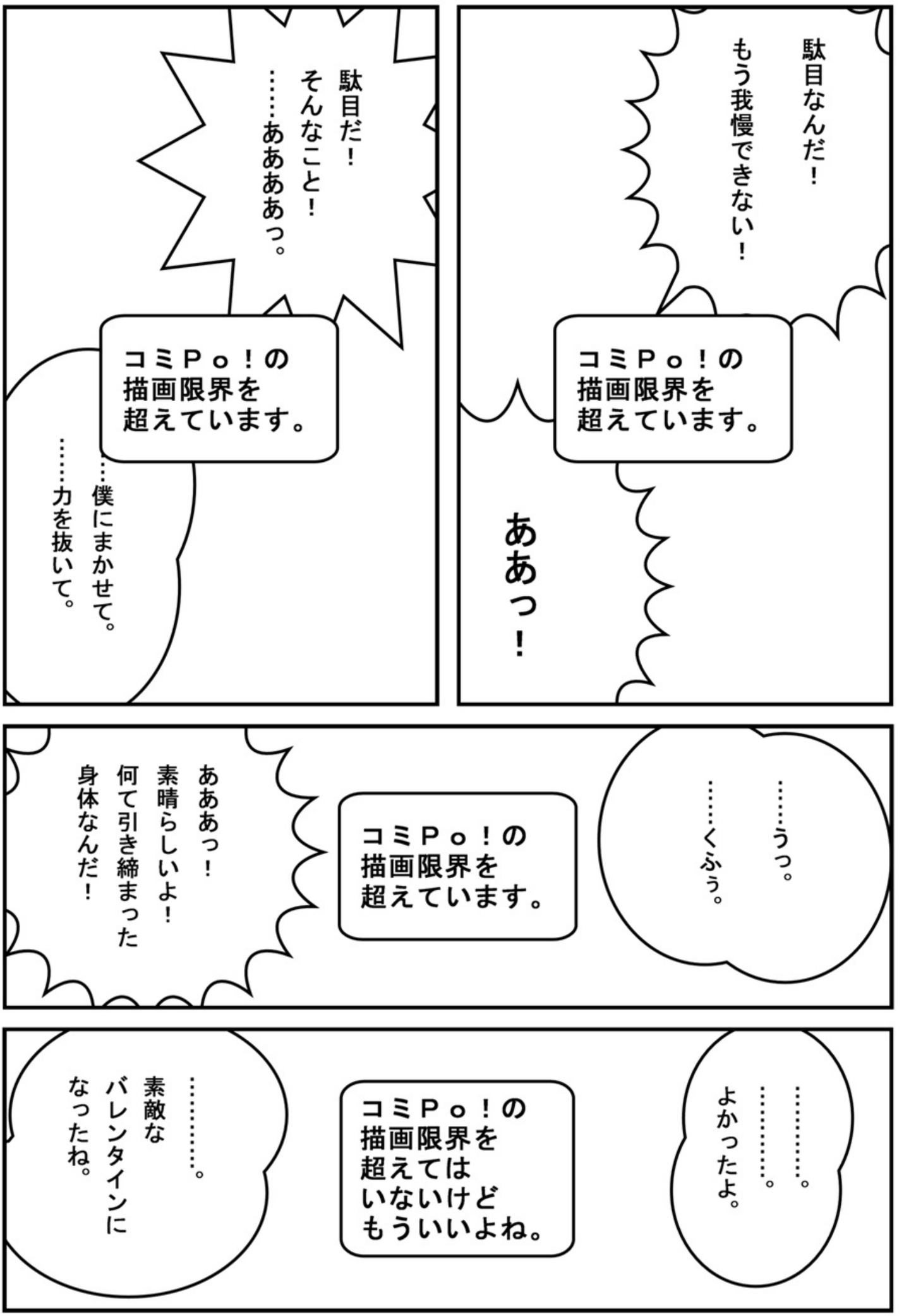
と困ったような、悲しいような顔をしている。
「俺があかりを好きだって？」
そんなことは一言も言ったことはない。それに最近は一緒にいることもなくなっていたのに……。
「ずっと見てたら、分かるよ」
四宮はもう俺を捕まえてはいなかった。
なのに動くことができなかった。じっとして、黙って四宮の言葉を聞かなければいけないような気がした。
「俺、ちゃんと三浦に断るから……だから安心していいよ」
そう言って優しく笑った四宮の顔は大人みたいだった。

かっこいいなって思った。そして、何だか心の奥のほうが暖かくなった気がした。

全てのチョコは君のもの

ふっ。
どこへ
運びましょうか？
五階の空き教室に……。
……あそこなら、誰も
入ってこないから。
？
誰も来ない？
あ、いや。
安全に
保管できるから。
カチャ
ここに
置いておくぞ～。
……ったく。

……高田君。
ボクはね。
女の子から
チョコをもらっても
嬉しくないんだ。
……え？
それって……。
……ずっと、ずっと
前から、君のことが
好きだった……。
ちょちょ、
ちょっと待って！
お、落ち着こう
じゃないか！


駄目なんだ！
もう我慢できない！
コミＰｏ！の
描画限界を
超えています。
ああっ！
駄目だ！
そんなこと！
……あああああっ。
コミＰｏ！の
描画限界を
超えています。
……僕にまかせて。
……力を抜いて。
……うっ。
……くふぅ。
コミＰｏ！の
描画限界を
超えています。
ああああっ！
素晴らしいよ！
何て引き締まった
身体なんだ！
……。
……。
よかったよ。
コミＰｏ！の
描画限界を
超えてはいないけど
もういいよね。
……。
素敵な
バレンタインに
なったね。

Happy Valentine 2011 目次

5 巻頭文 もりか

タケノコノベルズ 正しい恋のカタチ

8 はじめての 悠&よぴー

10 初恋自爆 水晶一輝

13 あの頃、友理さんが好きだった 高田公太

14 ありがとね 寺川智人
17 ホットチョコレート 寺川智人
25 本命 悠&よぴー
26 大きな義理 菊地順
28 ここにいること Ｚｅｒｏ
29 日付と距離を越えて ひょーじ
30 いじわるハニィ 玉置真珠
31 ごっこ 神沼三平太
33 上手 神沼三平太
35 なまもの 神沼三平太

37 ニブチン サデスパー堀野
38 過剰包装 サデスパー堀野
39 悲しき同人屋 サデスパー堀野
41 バレンタインの夜 もけたろう
44 葬恋 もりか
47 今日だけ 加藤一
48 あなたの笑顔が見たくて 悠&よぴー
51 いつもの 加藤一
52 また来年 かずぷー

水晶箱　乙女の恋
58　ガトーショコラ　悠&よぴー
60　となり　寺川智人
72　パーティ　もりか
単二嫌ナ話　切ない変
76　お見通し　黒実操
78　お見通し2　菊地順

怪集　おどろの戀

80　僕の種　藍明
84　Ｌｏｖｅ ｏｒ Ｄｉｅ　深川拓
94　ちよごれいとぉ　黒実操
99　熱い想い　黒実操
104　後悔　ねこや堂

Sweet&Tweet 僕らのラヴ

106 静想 有川憂
108 ソフトクリーム・番外編 水澤純
113 ソフトクリーム・番外編 蒼弥
118 いつもありがとう 蒼弥
121 三人目のＫＩＮＧ 須藤安寿
137 義理と人情チョコレート かずぷー
138 裏庭 もりか
152 全てのチョコは君のもの あみゃみゃまじゅんじ

もっと
読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、日々ニョキニョキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

http://tknk.wwu.jp/?p=1018

こちらのページまでご感想をお寄せ下さい。また、

【竹の子書房】HappyValentine2011 #tknk

に、ご感想を一言添えて ReTweet してくださいませ。RT がたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

竹の子書房文庫創刊に寄せて

竹野美恵

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみを忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあって、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨砕身し、筍書房はウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「ＢＬ」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、ＣＩ戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字をという配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。

竹の子書房

TAKENOKO NOVELS

Happy Valentine 2011

2011 年 2 月 18 日　初版発行
2011 年 2 月 19 日　改訂第五版発行

発案　もりか @_molica_
著者（50音順）　Zero/ あみゃみゃまじゅんじ / かずぷー
サデスパー堀野 / ねこや堂 / ひょーじ
もけたろう / もりか / 加藤一 / 菊地順
玉置真珠 / 高田公太 / 黒実操 / 寺川智人
深川拓 / 神沼三平太 / 須藤安寿 / 水晶一輝
水澤純 / 蒼弥 / 悠＆よぴー / 有川憂 / 藍明

監修　加藤 一 @azukiglg
カバー　とん @tonnyorori
装幀　田中真美 @tanakandesu

発行人　加藤 一 @azukiglg
発行所　竹の子書房 @takenoko_shobo
http://www.takenokoshobo.com/
製版所　GLG 補完機構

©molica/Takenoko-Shobo 2011 Assembled in Minami-Nagasaki